

七澤賢治先生の講話から「不協和音」に関する記述

皆様一人ひとりが、今の心境と体の状態であげる祓いの声が、その時の真実であって、それが若干の不協和音になっても、一向に構わない。その理屈といったら失礼ですが、父韻と母音が重ね合って、密と疎という波で一つの音が、一音一音が出て縦波になるわけです。そこから出てきた周波数が重なり合わさって、それがまた心の縦波になっていく。調子が悪いことも含めてみんなで祓う祓いになるわけです。ですからそれも一向に構わないのです。

次にあるのが感情の問題です。どう考えても不協和音を聞いていると、体や情緒の具合が悪くなるとか、嫌になるとかして、だからやりたくないとなる。あるいは、隣の人が大きい声を出すから出来ないとか、感情的な問題で否定するということですね。これらは私が体験してきたことであって、何も皆さんのことを言っているのではないですよ(笑)。次に、宗教とか、そういうものに関する問題ですね。本当にこんなことをやっていたのかな、とかね。

不協和音ということでの、和音の1つとして認めて、それで、一人ひとりが出している今、この瞬間の情緒を大切にすることと繋がれば良いんですね。それは自分自身の出している情緒も知って自覚するということでもあります。その上で自己自身を思いやることもそうだし、他者を思いやるということも出てきます。

少なくとも嫌だなと思うことが逆に、自分自身がまだそういう心の中で拘泥があるということ、またそういう気持ちを排除しようとしていることの現れであるということを感じた方が良いかもしれませんね。不協和音があるとしても、そういうものは自分にもあるんだなということを確認するだけで、またその中でやっていくと、多分、自分自身も一番良い祓いがあがるし、みんなを逆に言えば、客観視できて、1つ1つ認めるということが出来る。そして更に客観視が出来て、許すというおかしですが、心から承認することが出来ると。そういうことが出来るのではないのかということ、今日、お祓いをあげていて感じました。

不協和音、和音、そういうものを超えてより良い祓いがみんなであがるということもできれば、非常にいいことではないかということで、今一気にデジタル化を図っていて、ボーカロイドというもので、それを実現しようとしているところがありまして、日々、朝な夕なにと言ってもいいぐらいですね改良して、皆様方にそれで一緒にあげていただけていくというかですね。ですから今日も全く新しいボーカロイドを用意して、今日の皆さんと一緒にそれをあげてみるというふうなことまで、創造的といえば創造的なんですけれども、新文化という新文化でもあるんですけれども、それが一番の古い、聖徳太子の頃からあったんではないかと、そういう学びをもう一度して、そこから引き出そうということも一緒にやらせていただこうということもあるわけですね。それも非常に日々怠らない、しかも毎日毎日、朝な夕なに新しいものをお出ししていくと。

どうもテンポの一つの揃うというのかですね。

結局、テンポが毎回毎回違っているのは、たくさんの人たちが祓いをあげていると、やっぱり、その時の自分の感情や、今テーマになっている思いがどうしても出てきてしまって、それがキッカケになって、不協和音になっていく場合が多いということを感じています。

そのあたりが、感情に左右されないでいくための方法としての祓詞というのが、鎮魂なんですけれども、テンポを一定にすることと、感情を出すことが祓いの中で分かってですね、それで、注意するところができるようになると、またより自分でスピードや感情をのせるということができる方法があるということは、先生にお伺いしたいところなんですけれどもね。

本来、音楽というのは、そういう感情というか、そういう発露というか、そういうものでもあるのだと思うんですけれども、祓いというのは、そこを超えて、鎮魂のための祓いになれば良いかなと。そんなことを考えて、誰の一緒にあげているか、誰の言葉だから嫌だとか良いとか、それを外において、祓いができるような、そういう学習法を確立できれば、お祓いの世界も、大祓の世界も、だいぶ変化するのではないかということがあって、お願いする部分があるんですけれども。